

聖書:使徒の働き23章1～11節

説教:わたしを証しなさい

はじめに

パウロがエルサレム教会を訪問したとき、兄弟たちはパウロのこれからのことを心配しました。パウロがモーセの教えに背くように触れ回っている、そんな偽りの情報を信じ込んだユダヤ人たちが腹を立て、見つけたら殺してやろうと探し回っています。どうしたらよいか。そこで一計を案じました。パウロが、モーセの律法をきちんと守っているということをユダヤ人たちにアピールすればきっと誤解が解けるに違いない。そこでパウロはこのアドバイスに従い、律法に定められているとおりに身をきよめ、宮に入った。ところが、パウロは異邦人を宮に引き込んで宮を汚しているという、これもまた偽りのデマを叫んだユダヤ人たちに捕まり、エルサレムじゅうが混乱状態になってしまった。これが先週までのあらすじです。

1 パウロ

1) ローマ市民権

この騒ぎを聞きつけたローマ軍隊は、ただちに出勤してパウロを逮捕し、取り調べるためにむちで打とうといたします。そのときパウロは、自分はローマ市民権を持つ者であるから正式に裁判を受ける権利があると告げました。もしも裁判を受けさせずにいきなりむち打ちにしたなら千人隊長の首が飛んでしまいます。ローマ市民権はそれほどの権威があったのです。これを聞いた千人隊長はすぐに縄をほどいて丁重にパウロを扱うことにします。「ああ、よかった」ということではありますが、一つだけ疑問が残る。パウロは自分の身の安全を守るためにローマ市民権を持ち出したのか。そんなはずはない。ではどういうわけだったのか。そのことはまた後で触れます。

2) 予備裁判

千人隊長は当初、この騒ぎは簡単に処理できると踏んでいたはずですが。ところがローマ市民権という話が出てきたことで、いい加減なことができなくなります。パウロが正式な裁判を受けられるように、手はずを整えなければなりません。22章30節。「翌日、千人隊長は、パウロがなぜユダヤ人たちに訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を解いた。そして、祭司長たちと最

高法院全体に集まるように命じ、パウロを連れて行って、彼らの前に立たせた。」

日本の国では大切なことは国会で決めることになっています。最高法院もそれに似ていてイスラエルの国会に相当する期間です。しかし違うところがひとつあって、最高法院は裁判所の役割も兼ねていました。そんな最高法院を千人隊長が招集したのはなぜか。千人隊長はこの後、パウロの裁判のことでローマ総督の判断を仰ぐこととなります。そのとき、パウロはこうこうこういう理由でユダヤ人から訴えられていますと説明しなければならない。ところがユダヤ人から話を聞いてみても、問題になっているのはユダヤ人の律法に関することなので、自分では手に負えない。そこで権威のある人たちを呼び集め、パウロの何が問題で訴えようとしているのかを整理してもらおうとしたというわけです。

2 死者の復活について

1) 健全な良心にしたがって

その最高法院の席上でパウロが語ったことは、大きく二つあります。一つ目は1節。「兄弟たち。私は今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました。」

みなさんはどう思われたでしょうか。こんなことを自分の口で言うのはどうなのか。大祭司アナニアが腹を立てるのも無理がない。ここだけ読めばそんな印象になる。けれどもあのパウロです。自分弁護するためにこんなことを言うわけではない。ではどういうことなのか。そのことは、パウロが語った二つ目のこととつながっています。

2) サドカイ人とパリサイ人

私たちは同じユダヤ人とひとくくりで考えますが、旧約聖書の解釈の違いによっていろいろな派閥がありました。その一つがサドカイ人、あるいはサドカイ派です。彼らは復活も御使いも霊もない。そういうグループです。言い換えれば、聖書は科学的ではない、合理的ではない。たんなる神話であると切り捨ててしまう。今の時代ならこんなふうに聖書の奇跡を信じない人たちがいるのは不思議ではありませんが、昔だって同じように考える人たちがいたのです。そんな人たちがなぜ大きな組織をつくっていたのか。簡単です。権力やお金、

この世の名誉を独占していたからです。信仰がなくともそういうことはできる。

そしてもう一つのグループがパリサイ人でした。こちらはサドカイ人と正反対で、復活も御使いも霊も信じる。パウロはもともとクリスチャンになる前は、このパリサイ派に属していて活動していましたから、彼らのことはよくわかっています。

3) 激しい論争

そこでパウロは二つ目のことを語ります。6節。「パウロは、彼らの一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人であるのを見てとって、最高法院の中でこう叫んだ。『兄弟たち、私はパリサイ人です。パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。』」

この二つのグループの人たちにしてみれば、死者の復活という話題は分ではいけない地雷のようなもの。ふだんは意識してこの話題は避けています。ところがパウロが「自分は死者の復活を信じていて、そのことでさばきを受けている」と叫んだのですからたまりません。会議はたちまち二つに割れて、たいへんな騒ぎになります。

どうしてパウロはこんなことをしたのか。わざと騒ぎを起こして、そのすき逃げようとでもしたのか。まさかそんなはずはない。外はローマ兵によって嚴重に固められています。そもそもパウロは最初から死ぬ覚悟があるのですからそんな小細工はするはずがない。

4) パウロが証ししてきたこと (26章23節)

ではなぜパウロは死者の復活のことをもちだしたのか。難しく考えることはありません。パウロは、イエス・キリストを異邦人に伝えるために伝道者として召されました。三回にわたって地中海沿岸を巡って伝道旅行をしたのはそのためでした。ここで問題なのは、彼はイエス・キリストの何について伝えようとしていたのかです。この後パウロは、フェストゥス総督とアグリッパ王の前で弁明することになるのですが、26章23節でこんなふうに話している。「すなわち、キリストが苦しみを受けること、また、死者の中から最初に復活し、この民にも異邦人にも光を宣べ伝えることになると話したのです。」

キリストが十字架で苦しみを受けることと、この方が死者の中から最初に復活されたこと、このことを語ってきた。今日の最初のところで、パウロが自分のことを「私は今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました」

と語ったのはどんな意味だったのかと言いました。自分はいつも正しく品行方正に生きてきた、という意味ではない。キリストが死者の中から最初に復活したように、私たちも復活する。このことについて、ほかのものと混ぜ物をしたり、水で薄めたりはしなかった。聞く相手が理解できるか、信じてくれるかどうか、そんなことを気にしないで、いつも真っ直ぐに語ってきた。そことについては、なにもやましいところはない。「健全な良心にしたがって」というのはそんな意味だったのです。

3 イエス・キリストの励まし

1) 正しいことを語っても落ち込む

パウロはこの真理を語るために、いのちをかけて戦ってきました。ではいつもブルドーザーのようにどンドン前に進む人であったのか。そんなことはない。パウロも人間です。彼も落ち込んでしまった。なぜそうわかるか。11節で主がこう語っておられるからです。「その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証ししたように、ローマでも証しをしなければならぬ」と言われた。」

「勇気を出しなさい。」心が弱り果てていたので、このような声かけがありました。落ち込んだ理由は二つ考えられます。一つ目。自分はローマ市民権を持っていると告げた理由にも関わることで、彼はずっと以前からローマに行きたいと願っていたのですが、ずっとそれがかなえられない。このピンチをチャンスに変えるよい機会ととらえます。ローマ市民権を持ち出すことによって、ローマに行く可能性が開ける。ところが道が開けるどころか、混乱が続くばかり。落ち込んだ一つ目の理由です。

そして二つ目。最高法院でキリストの福音を語ったのに、ほとんど受け入れる者が現れなかった。この二つのことで落ち込んだ者と思われれます。

そのとき主がパウロに語りました。あなたのやってきたことは決して間違っていない。エルサレムでもあなたはきちんとイエス・キリストを証ししてきた。それと同じように今度はローマでもわたしのことを証ししなさい。つまり、あなたは必ずローマに行くことになると言ってな励ましをしてくれました。

2) なにを信じているのか

パウロのことから自分のことを振り返ります。私たちは一体何を信じてきたのでしょうか。神は私を

愛して下さっている。もちろんそのとおりです。神は私の罪のために十字架で死んでさばきを受けられた。そのとおりです。神は私を守り導いてくださる。それもそのとおり。しかしそれだけは肝心なところが抜けている。キリストが死者の中から最初に復活したように、私たちもよみがえり、いまは天の御国へと招かれている。このことを心の底から信じているのかどうか。パウロのように、私は今日までこの望み一つを信じて生きてきましたと告白できるのか。そのことを心に留めていたでしょうか。

3) たとえ今は信じられなくても

私たちはパウロのような伝道者ではないかもしれませんが。でもイエスのことばは、私たちにも同じように語られているのではないのでしょうか。私たちがクリスチャンとして歩むときに、イエス・キリストのことをまったく証ししないで、この世の人たちと同じように生きていくということはありません。いつかどこかで、主を証しすることになります。そのとき大切なのは、何を証しするかです。核心部分を抜かすことは絶対にできません。主は十字架で苦しみを受けられ、死者の中から最初によみがえられたこと、このことを世の人たちに証しし続けていくことになります。

そういうとき、証しする自分自身が本当に信じているのか、問われることになります。パウロのように、主の前にまったき良心をもって生きているのか、いつも考えることになります。

もちろんこんな方もおられるでしょう。死んだ人がよみがえるのだろうか。まだよくわからない。そんな方でも大丈夫です。私は、死者の復活を信じられないまま洗礼を受けた者です。後になってからだんだんわかるようになっていきました。神という方はそのような方です。よみがえりが分からないという方がおられるなら、神は信じられるようにと私たちに関わり続けます。一番良いときが来たらそのとき信じてよいのです。そのときまで主は待ってくださいます。主がともに歩んでくださいます。